

# 鹿伏・中所遺跡

—— 県立三木高等学校東駐輪場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 ——

平成 10 年 3 月

香 川 県 教 育 委 員 会

## 目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	1
第3章 調査の成果	3
第4章 まとめ	13

## 挿図目次

第1図 調査地位置(1)	1	第10図 S H02 出土遺物実測図	10
第2図 調査地位置(2)	1	第11図 S H03 出土遺物実測図	11
第3図 立地と環境説明図	2	第12図 S B01 平・断面図	11
第4図 遺構配置図	5	第13図 S K02 平・断面図	11
第5図 土層断面図	8	第14図 S K02 出土遺物実測図	11
第6図 S H01 平・断面図	9	第15図 S T01 平・断面図	12
第7図 S H01 出土遺物実測図	9	第16図 S T02 平・断面図	12
第8図 S H02 平・断面図	10	第17図 S T02 出土遺物実測図	12
第9図 S H02 炭化物・焦土平面図	10	第18図 包含層 出土遺物実測図	12

## 表目次

第1表 遺物観察表	13
-----------	----

## 写真目次

写真1 下層遺構完掘状況(西から)	7
写真2 上層遺構完掘状況(西から)	7
写真3 S H01完掘状況(南から)	9
写真4 S H02完掘状況(南から)	10
写真5 S T02調査状況(北から)	12

## 例 言

1. 本書は県立三木高等学校の東駐輪場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。
2. 本遺跡は、香川県木田郡三木町鹿伏に所在する。
3. 調査は香川県教育委員会高校教育課より依頼を受け、同委員会文化行政課が実施した。
4. 調査は文化行政課文化財専門員木下晴一が担当した。
5. 本書挿図中のレベル高は海拔（T.P.）、方位は国土座標第Ⅳ系の北を示す。
6. 挿図の一部に建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「高松南部」を使用した。
7. 発掘調査、整理作業を通じて県立三木高等学校、(財)香川県埋蔵文化財調査センター、その他関係各位より多大な御協力、御援助を得た（順不同）。
8. 本書の執筆、編集は木下がおこなった。
9. 出土遺物は香川県教育委員会が保管し、坂出市府中町南谷5001-4 香川県埋蔵文化財センターに収蔵している。

## 目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	1
第3章 調査の成果	3
第4章 まとめ	13

## 挿図目次

第1図 調査地位置(1)	1	第10図 S H02 出土遺物実測図	10
第2図 調査地位置(2)	1	第11図 S H03 出土遺物実測図	11
第3図 立地と環境説明図	2	第12図 S B01 平・断面図	11
第4図 遺構配置図	5	第13図 S K02 平・断面図	11
第5図 土層断面図	8	第14図 S K02 出土遺物実測図	11
第6図 S H01 平・断面図	9	第15図 S T01 平・断面図	12
第7図 S H01 出土遺物実測図	9	第16図 S T02 平・断面図	12
第8図 S H02 平・断面図	10	第17図 S T02 出土遺物実測図	12
第9図 S H02 炭化物・焦土平面図	10	第18図 包含層 出土遺物実測図	12

## 表目次

第1表 遺物観察表	13
-----------	----

## 写真目次

写真1 下層遺構完掘状況(西から)	7
写真2 上層遺構完掘状況(西から)	7
写真3 S H01完掘状況(南から)	9
写真4 S H02完掘状況(南から)	10
写真5 S T02調査状況(北から)	12

## 第1章 調査に至る経緯と経過

平成8年度に開校した香川県立三木高等学校の敷地には、平成6年度の試掘調査によって、弥生時代中期から古墳時代前期を中心とする集落跡が所在することが明らかとなり、平成6、7年度に（財）香川県埋蔵文化財調査センターにより約15,400㎡の発掘調査がおこなわれた。発掘調査対象となったのは校舎、水路など遺跡に影響をあたえる工事部分である。発掘調査と学校建設工事は工程の調整をおこないつつ同時並行で進められたが、設計変更により新設することとなった東駐輪場（160㎡）用地の発掘調査は、現地での工程調整など様々な事情により平成7年度内に（財）香川県埋蔵文化財調査センターによって調査をおこなうことが不可能となった。このため関係各課との協議の結果、文化行政課直営で実施することとなった。

発掘調査は平成8年8月12日から9月9日までの期間（実働18日間）で実施し、翌平成9年度に本概要報告書を刊行した。

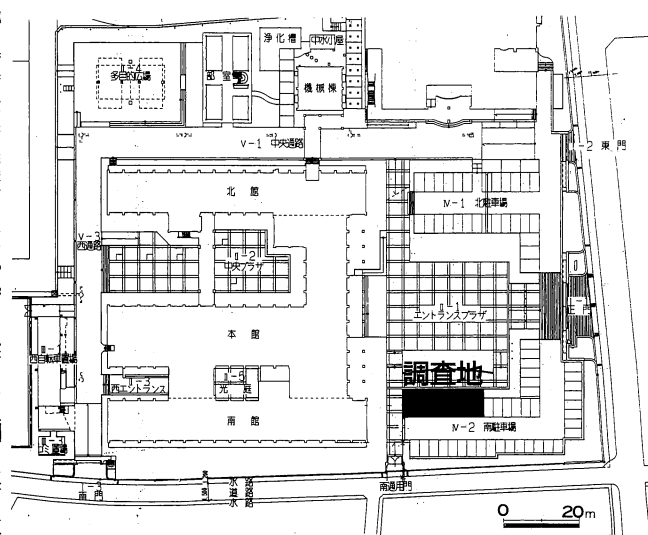
## 第2章 遺跡の立地と環境

調査対象地は、低丘陵にはさまれた幅2km程の沖積平野上に位置する。この沖積平野は高松市の屋島西方で瀬戸内海に注ぐ吉田川、新川といった小河川によって形成されているが、最短で約1.5km離れたところを流下する鴨部川は志度町東方で瀬戸内海に注いでいる。両者の間に明瞭な分水界は存在しない。第3図に示すとおり新川と鴨部川の間には、東南から西北方向に流れる旧河道が存在する。この旧河道は鴨部川水系であり、かつて鴨部川は高松市方向に流下していた時期があることがわかる。

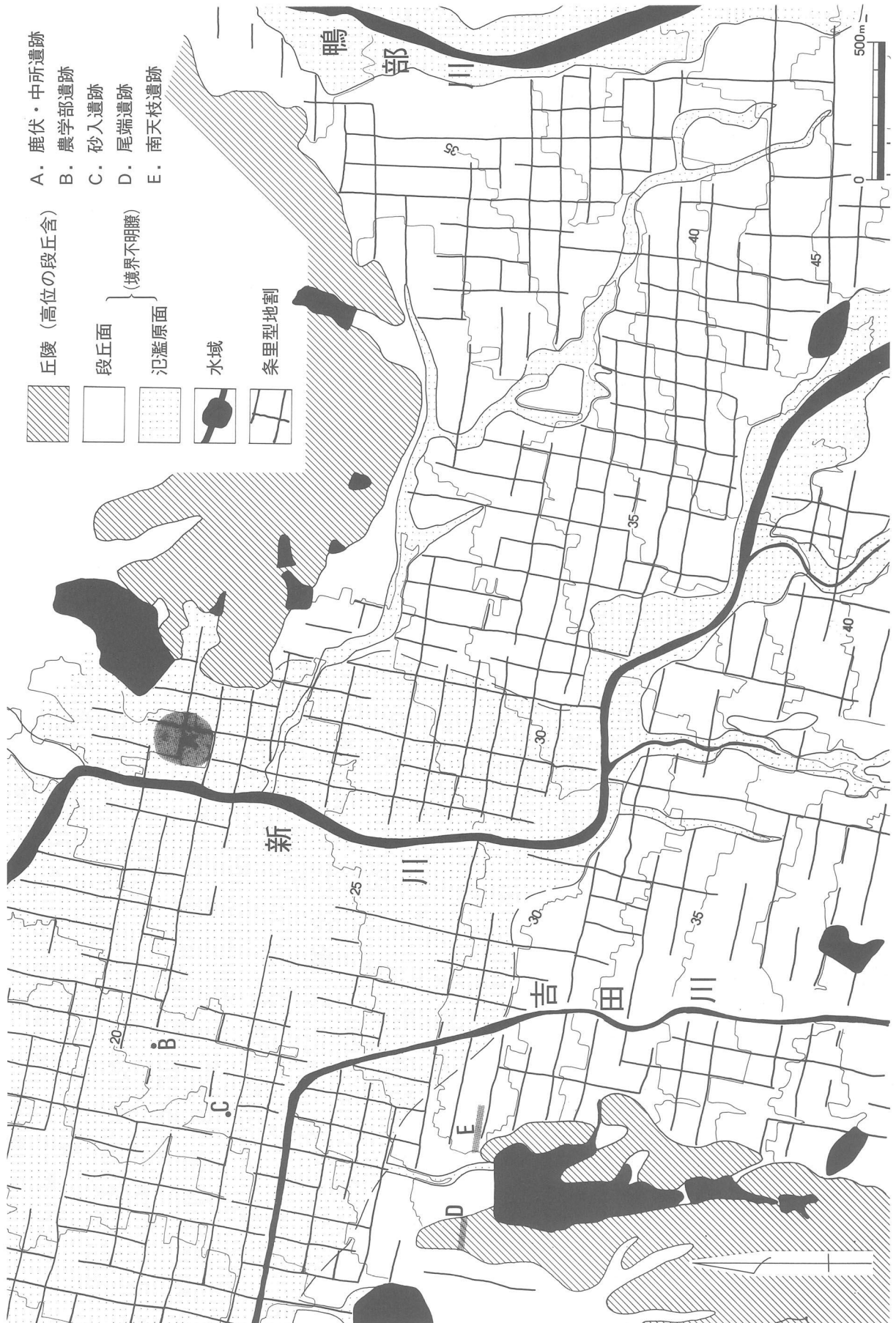
この付近は、高松市内に広範に分布する南北線が東に11度傾く条里型地割と長尾町・寒川町・大川町に分布する正方位の条里型地割の接触部にあたる。ここでは菱形の地割が見られるなどの特色が見られるが、先述の旧河道が条里の施工に何らかの影響を与えていることが読みとれる。また、新川、吉田川



第1図 調査地位置(1)(1/5万「高松南部」)



第2図 調査地位置(2)



第3図 立地と環境 説明図

も条里の阡陌の方向に流路を固定している区間があり、現在みられる流路や水系は条里型地割の施工と関連する可能性が高い。これは逆に、条里以前の水系は現在と異なるものであった可能性が高く、条里以前の地域社会を考える場合注意を要する点である。県内にはこのように明確な地形による障壁が無いままに、坂出市と国分寺町、国分寺町と高松市、三木町と長尾町といったように漠然と一つの地域と考えられている範囲がルーズに接続している地域があるのが特徴である。

鹿伏・中所遺跡は自然堤防と推定される微高地と縁辺の旧河道が調査され、微高地上から弥生時代中期から古墳時代前期までの集落を検出している<sup>10)</sup>。また、農学部遺跡では給水管等の改修工事に伴う調査で、造成以前の地表面下約2mから弥生時代前期後半の遺物を多量に検出しているが、遺構の内容は不明である<sup>11)</sup>。砂入遺跡は、古墳時代前期の集落などが検出されている<sup>12)</sup>。これらの遺跡の範囲と微地形との関連を検討することは重要な視点であるが、当時の微起伏はほぼ埋没しており、空中写真上で暗示的な色調の差として判読しうるにすぎない。これは撮影時の異なる写真の相互比較によって判読する必要があるが、現段階では図示しうる精度での判読は行っていない。

- (1) 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林遺跡 鹿伏・中所遺跡 平成6年度』1995 同『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 鹿伏・中所遺跡 平成7年度』1996
- (2) 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度』1996
- (3) (財)香川県埋蔵文化財調査センターほか『池戸郵便局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 砂入遺跡』1996

## 第3章 調査の成果

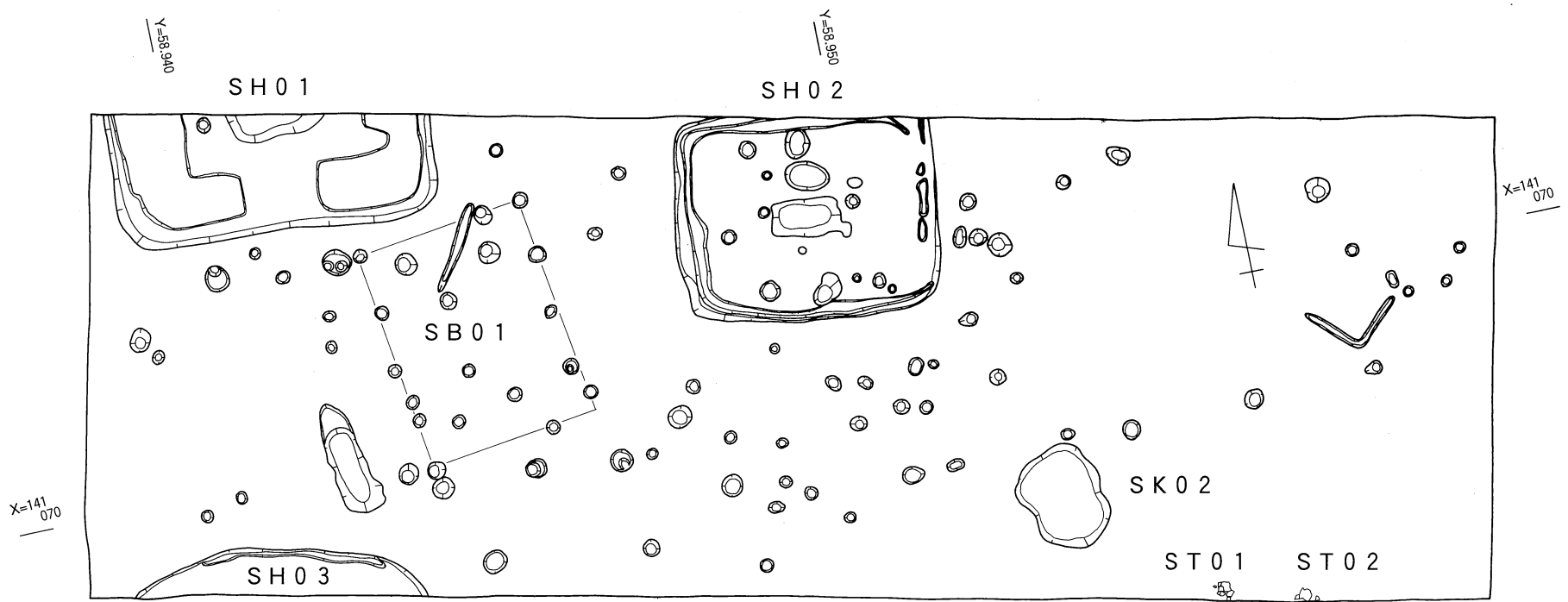
### 1. 概要

調査対象地は長辺21.4m、短辺7.5mの東西に長い長方形で、面積は160.5<sup>2</sup>mである。遺構面は2面あり、上層遺構面まで堆積土を重機で掘り下げ、人力で精査したのち、下層遺構面まで再び重機で掘り下げ、人力による精査をおこなった。

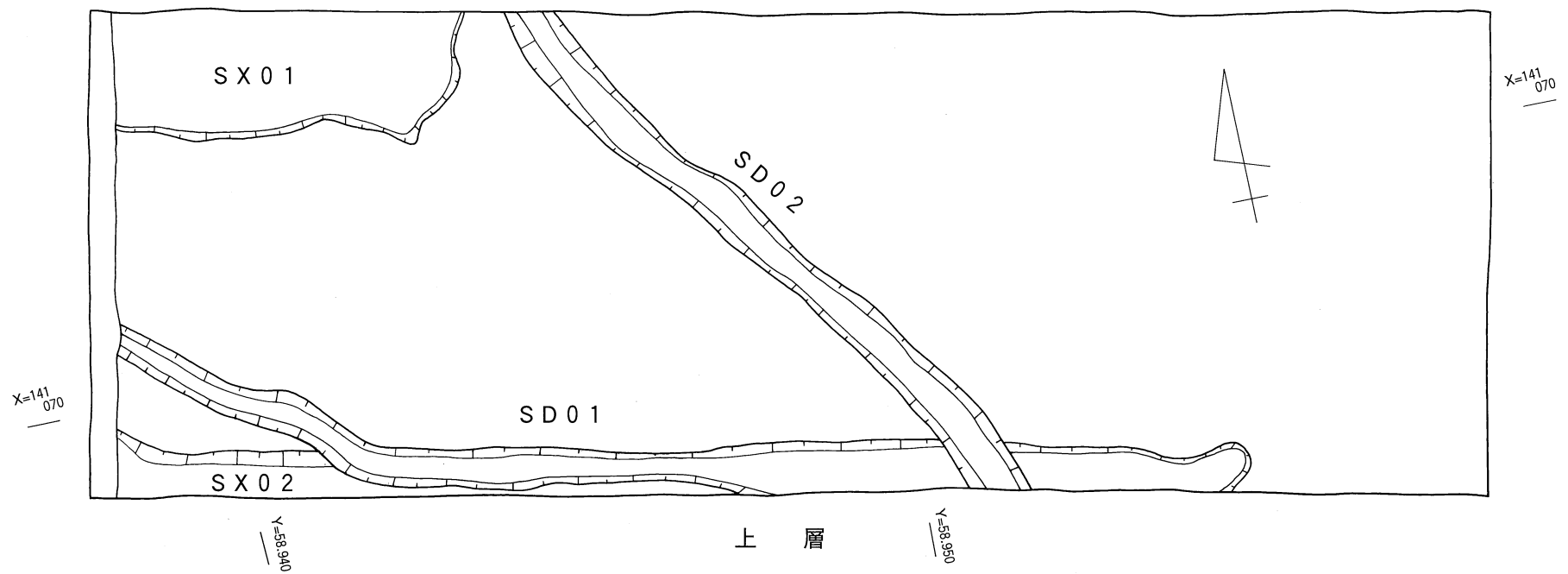
調査の結果、上層遺構面では時期不明の溝状遺構2条、下層遺構面では弥生時代の竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟、土器棺墓2基、土坑2基、柱穴多数を検出した。出土遺物は28リットル入りコンテナ8箱分の土器、石器である。

### 2. 層序

第5図に調査区西壁および北壁の西半分の断面図を掲げる。学校建設以前の地筆は水田であり、造成土下(未図化)に水田耕土層があり、明褐色砂混じりシルト質土の床土下に弥生土器小片を包含する暗赤褐色小礫混じり砂質土層が現れる。この上面が上層遺構面である。暗赤褐色小礫混じり砂質土層の厚さは30~40cmで、この層の下のにぶい黄褐色砂混じりシルト質土層の上面が下層遺構面である。にぶい黄褐色砂混じりシルト質土層は南北方向では南に緩やかに下方に傾斜しており、一部に黒色砂層が堆積している。



下層



上層



第4図 遺構配置図





写真1 下層遺構完掘状況（西から）

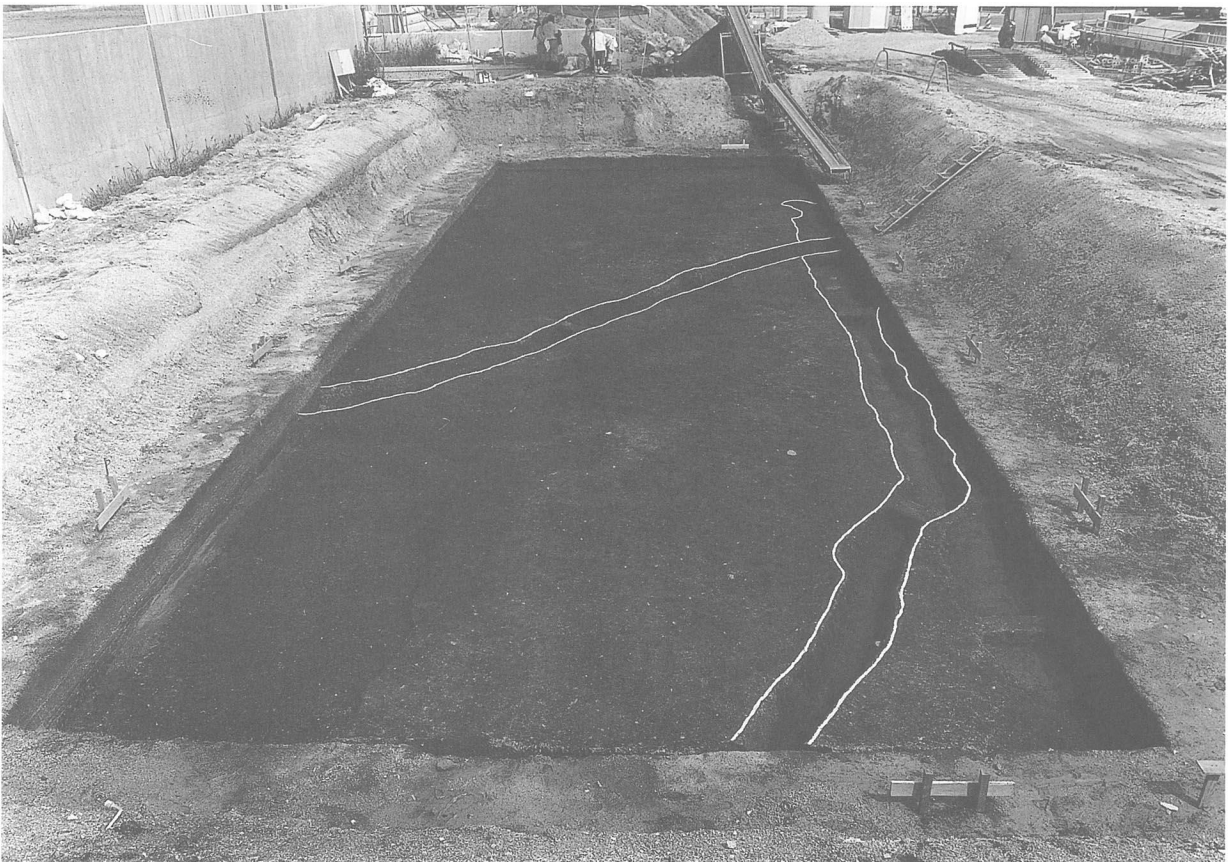
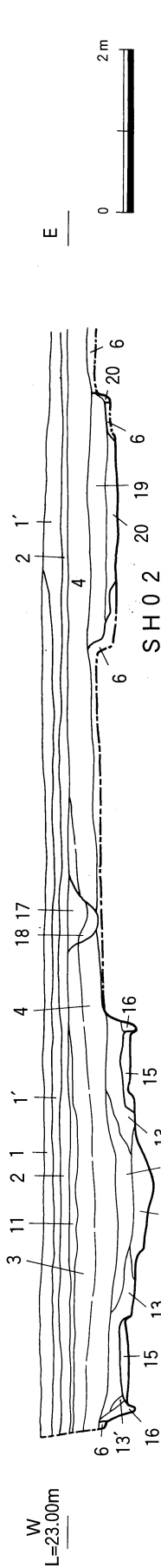
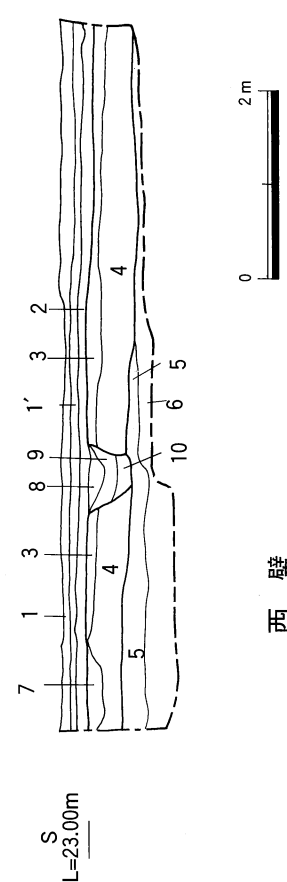


写真2 上層遺構完掘状況（西から）



- SH01
1. 灰色粗砂混じり極細砂質土 (水田耕土、5Y 5/1)
  - 1'. 灰色粗砂混じり極細砂質土 (水田耕土、5Y 6/1)
  2. 明褐色砂混じりシルト質土 (床土 Fe多含、7.5YR 5/8)
  3. 暗赤褐色小礫混じり砂質土 (Fe、Mn含、5YR 3/2)
  4. 暗赤褐色小礫混じりシルト質土 (Fe、Mn含、5YR 3/2)
  6. にぶい黄褐色砂混じりシルト質土 (Fe含、10YR 5/3) (地山)
  11. 灰色砂混じり粘質土 (N 6/)
  12. 灰色シルト混じり極細砂質土 (径2~3cm程のFeブロック含、N 4/ )
  13. 灰色極細砂混じりシルト質土 (径2~3cm程のFeブロックわずかな含 N 4/ )
- SH02
- 13'. 灰色極細砂混じり粘質土
  14. 暗灰色砂混じり粘質土 (N 3/ )
  15. 灰色砂質土 (灰色粘質土のブロック含)
  16. 灰色粘質土 (N 4/ )
  17. 灰色粘質土 (Fe含 5Y 4/1) } SD02
  18. 黒褐色砂混じり粘質土(7.5YR 3/1) }
  19. 灰褐色砂混じりシルト質土(Fe含、7.5YR 4/2)
  20. 褐灰色シルト質土 (10YR 5/1)

北壁 (西部)



- SH01
1. 灰色粗砂混じり極細砂質土 (水田耕土、5Y 5/1)
  - 1'. 灰色粗砂混じり極細砂質土 (水田耕土、5Y 6/1)
  2. 明褐色砂混じりシルト質土 (床土 Fe多含 7.5YR 5/8)
  3. 暗赤褐色小礫混じり砂質土 (Fe、Mn含、5YR 3/2)
  4. 暗赤褐色小礫混じりシルト質土 (Fe、Mn含、5YR 3/2)
  5. 黒色砂 (中砂主体、淘汰される、7.5YR 2/1)
  6. にぶい黄褐色砂混じりシルト質土 (Fe含、10YR 5/3)
  7. 灰色砂礫混じり粘質土 (N 6/)
  8. 灰色小礫混じり粘質土 (Fe含) } SD01
  9. 黒色小礫混じり粘質土 }
  10. 黒色小礫混じり砂質土 }

西壁

図5 土層断面図

### 3. 下層遺構

#### S H01

調査区の北西隅で検出した隅丸方形の平面形の竪穴住居である。北半分は調査区外に延びる。一辺の長さは約4.9mで、幅0.7~1m、高さ約8cmを測るベッド状遺構を盛り土によって設けるが、南辺中央部の幅約1.1mはベッド状遺構を欠いている。周囲には幅約30cmの壁溝が巡るが、この幅の粘土層を検出面においても一部認めることができた。板壁の痕跡と考えられる。中央付近で検出した土坑は炉の可能性はあるが、埋土中に炭化物や灰分を含んでいないため確定できない。柱穴は1穴のみ検出することができた。

出土遺物はコンテナ1/4箱、小破片が多く、完形に復原できるものは無かった。第7図1は甕口縁部小片である。丸くおわる端面に横方向の沈線を施したのち、縦方向に刻み目を施す。2、3も甕口縁部である。「く」の字に屈曲し端部は上方にわずかに摘み上げている。2、3から弥生時代後期後半の住居と考えられる。

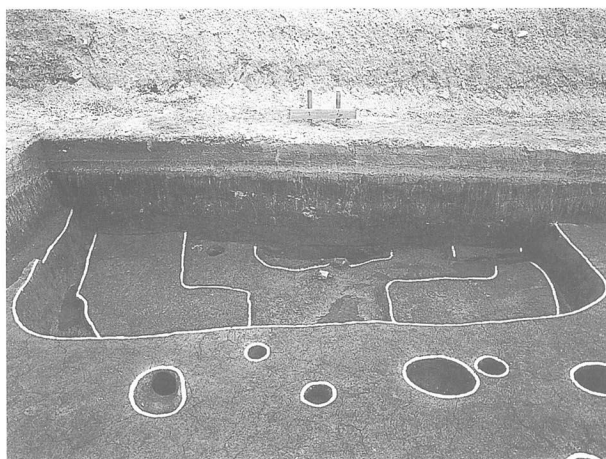
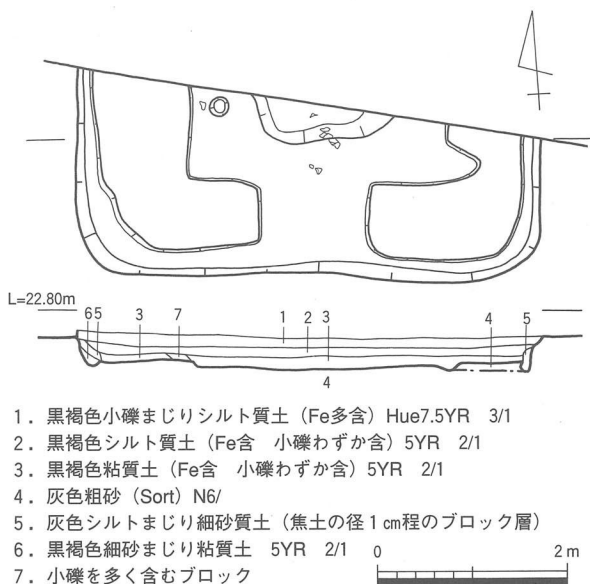
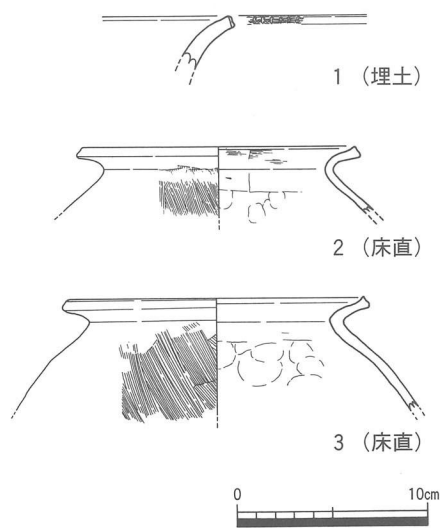


写真3 S H01 完掘状況 (南から)



第6図 S H01 平・断面図

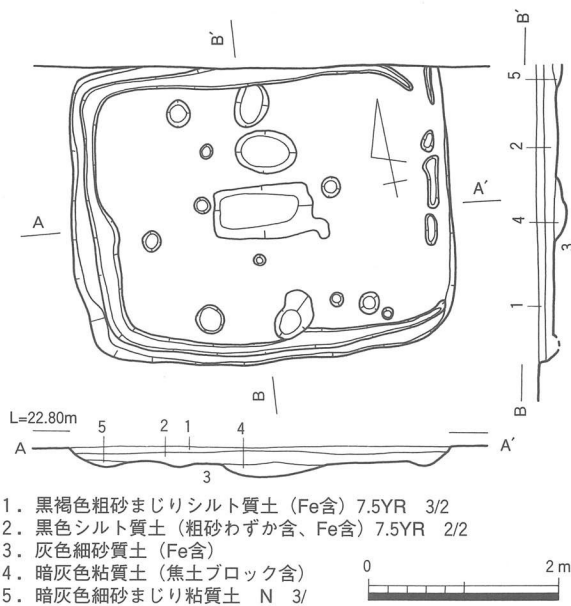


第7図 S H01出土遺物実測図

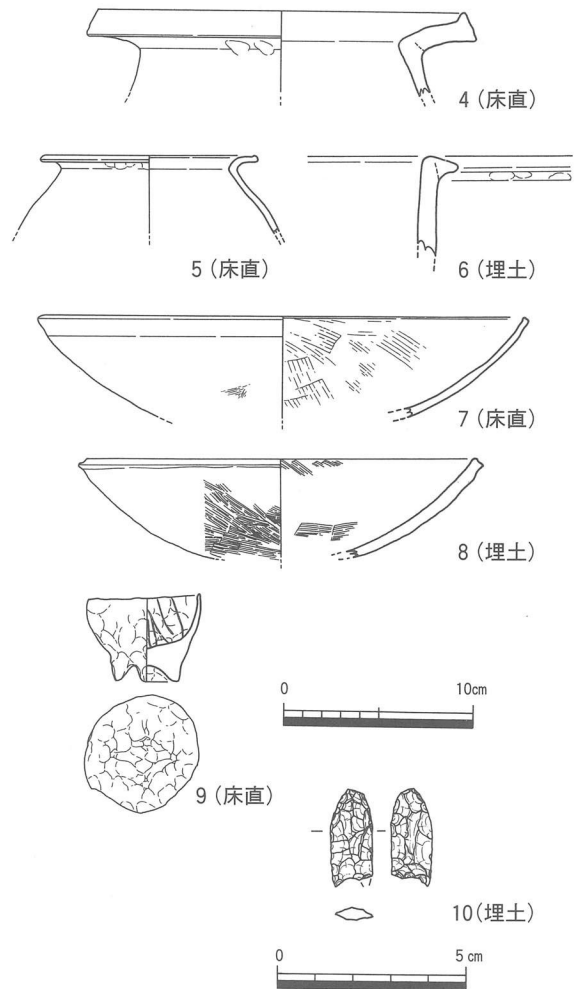
#### S H02

調査区の中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。一辺の長さは約3.2×4mで、検出面から床面までの深さ約15~20cmを測る。東面は断続的であるが四周に壁溝が巡り、中央に約0.6×1m、深さ約11cmの炉がある。多くの柱穴を検出したが、炉の東西にあるものが深さ14cm、27cmであるのに対し、

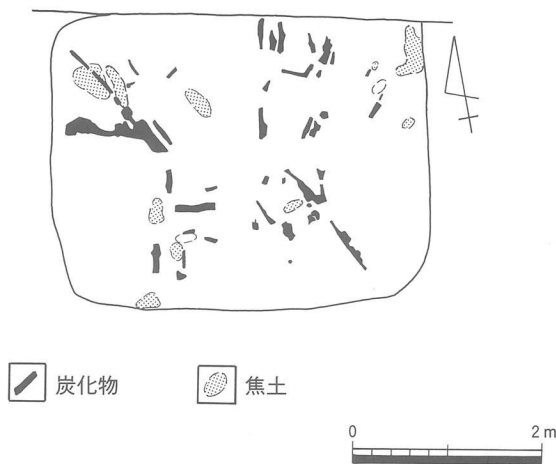
他は概ね3、4cmと浅いことから、前者の2支柱穴よりなる住居と考えられる。埋土中に炭化物、焦土を含んでおり消失家屋と考えられるが、出土遺物はコンテナ1/2箱で小破片が多く、完形に復原できるものは無かった。第9図1は壺口縁。短く屈曲する口縁で端面は上方に摘み上げている。6は断面三角形の口縁部の甕。混入であろう。7、8は鉢。9は手捏ねのミニチュア土器。4本の小脚を付す。10はサヌカイト製の石鎌（重さ1.03g）である。以上からSH02は弥生時代後期後半のものと考えられる。



第8図 SH02 平・断面図



第10図 SH02 出土遺物実測図



第9図 SH02 炭化物・焦土平面図

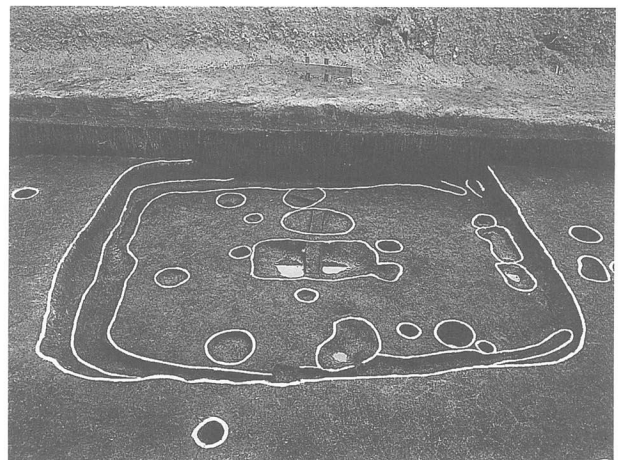


写真4 SH02 完掘状況（南から）

### S H03

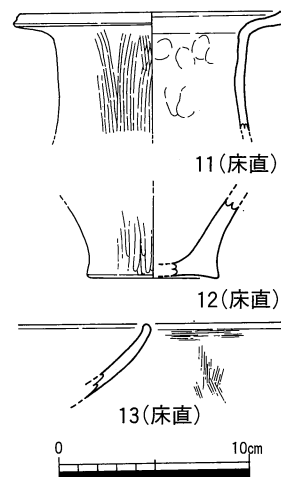
調査区の西南で検出した円形と考えられる竪穴住居である。幅約16、床面からの深さ4cmの壁溝が巡る。第10図1の壺小片から弥生時代後期前葉の住居と考えられる。

### S B01

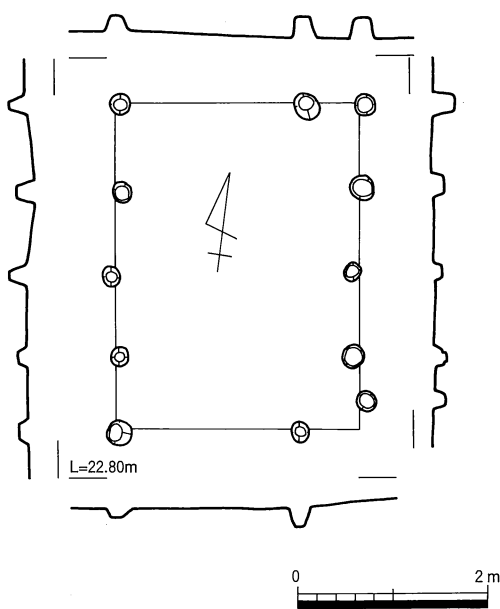
調査区内では多くのピットを検出したが、S H01と03の間のS B01が掘立柱建物として復原できた。S B01は2×4間で桁行3.5m、梁行2.6mを測る。柱穴から遺物は出土しなかった。

### S K02

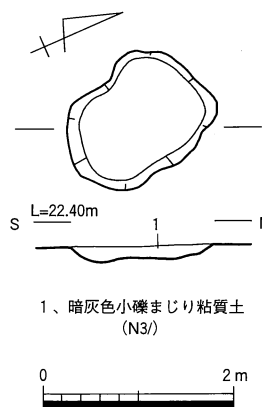
長辺160、短辺114、深さ18cmの土坑であるが、平面形も断面形も不整形なため自然形成の凹地として捉えるべきかもしれない。櫛描文の下に三角形の列点文を施した甕の破片が出土している。



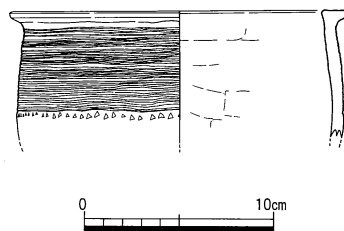
第11図 S H03  
出土遺物実測図



第12図 S B01平・断面図



第13図 S K02平・断面図



第14図 S K02出土遺物実測図

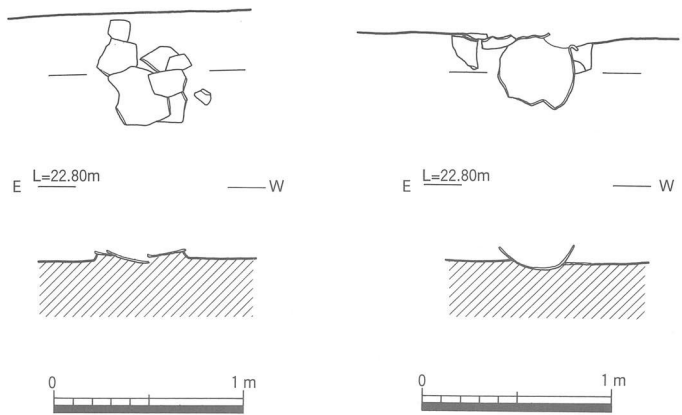
### S T01・02

調査区の東南隅付近で2基の土器棺墓を検出した。いずれも掘り方は検出できなかった。S T01は、口縁部を打ち欠いた甕が横倒しの状態で検出され、S T02は、2個の甕からなる。1個は横倒しの状態で据え置かれ、ほかの1個がその周りに散在する状況であった。いずれも遺存の悪い状態であるが、

(財) 香川県埋蔵文化財調査センターでの周辺での調査成果からみて土器棺と考えられる。第16図15、16はS T 02の土器であるが、弥生時代後期後半のものと考えられる。

包含層出土遺物

第17図は包含層（第5図4層）から出土した遺物である。17～19は甕、20、21は壺か甕の底部である。20には葉の圧痕

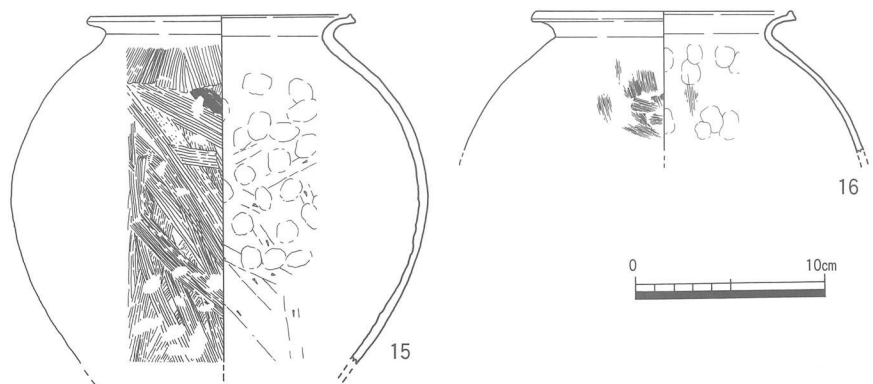


第15図 S T 01平・断面図

第16図 S T 02平・断面図

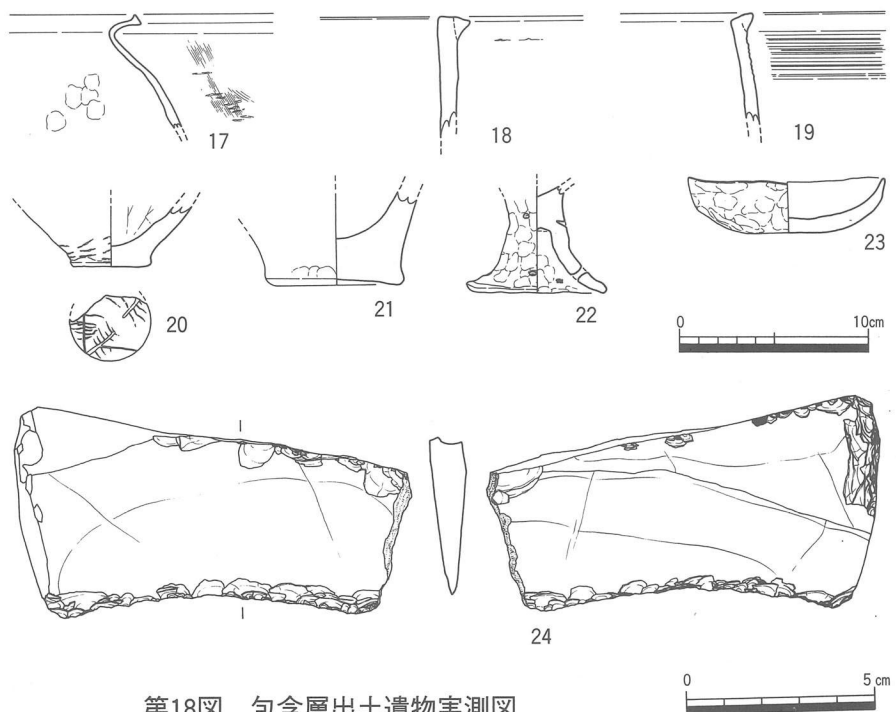


写真5 S T 02調査状況  
(北から)



第17図 S T 02出土遺物実測図

が見られる。22はミニチュアの高杯である。基部に4孔、裾部に4孔が不整位置に開けられる。なお、基部のものは未貫通、裾部のものは貫通している。23は手捏ねの鉢である。外面に指頭痕が顕著に認められる。24はサヌカイト製のスクレイパー（重量76.6g）である。



第18図 包含層出土遺物実測図

#### 4. 上層遺構

##### S D01・02

上層では2条の溝状遺構を検出した。S D01は調査区南端を東西方向に流れるもので、幅約60、深さ17～27cmを測る。S D02は調査区西北から東南方向に流れるもので、幅約70、深さ約30cmを測る。両者は切り合いがありS D02のほうが新しい。出土遺物はいずれも弥生土器の小片で、S Dの掘り込み面の包含層中に含まれる土器片と同一である。なお、S X01、02は下層に所在する竪穴住居の影響で生じた落ち込みである。土層断面図の11層にあたる。

### 第4章 まとめ

今回は狭い範囲の調査であったが、竪穴住居跡3棟を検出するなど大きな成果をあげることができた。周辺では(財)香川県埋蔵文化財調査センターによる調査で、弥生時代中期から古墳時代前期の竪穴住居約70棟、掘立柱建物約20棟、土器棺墓18基などを検出している。今後この調査データの整理の進展が期待される。

番号	器種	口径	底径 器高	胎土	色調	残存率
1	弥生土器 甕			1.0mm以下の石英その他少	内外 10YR5/2 灰黄褐	小破片
2	弥生土器 甕	14.2		0.5mm以下の石英、金雲母など	内外 7.5YR6/4 にぶい橙	1/8
3	弥生土器 甕	16		1.0mm以下の石英、金雲母など	内 10YR6/3 にぶい黄橙 外 10YR5/3 にぶい黄褐	1/5
4	弥生土器 壺	19.3		1.5mm以下の石英、金雲母など	内外 7.5YR6/4 にぶい橙	1/5
5	弥生土器 甕	11.2		1.0mm以下の石英、金雲母など	内外 7.5YR6/6 橙	2/8
6	弥生土器 甕			1.0mm以下の石英、赤茶色粒など	内 10YR8/2 灰白 外 10YR8/4 浅黄橙	小破片
7	弥生土器 鉢	26.8		1.0mm以下の石英、金雲母、赤茶色粒など	内 5YR6/6 橙 外 5YR5/6 明赤褐	小破片
8	弥生土器 鉢	20.5		1.0mm以下の石英、赤茶色粒など	内 10YR7/4 にぶい黄橙 外 10YR6/3 にぶい黄橙	3/8
9	弥生土器ミニチュア	5.8	底3.4 器4.4	1.0mm以下の石英、金雲母、赤茶色粒など	内外 10YR6/3 にぶい黄橙	完形
11	弥生土器 壺	13.7		0.5mm以下の石英、金雲母など	内外 10YR7/3 にぶい黄橙	小破片
12	弥生土器 甕		6.6	1.0mm以下の石英その他少	内 2.5Y7/2 灰黄 外 2.5Y7/3 浅黄	2/8
13	弥生土器 鉢			0.5mm以下の石英、金雲母など	内 7.5YR7/6 橙 外 10YR7/3 にぶい黄橙	小破片
14	弥生土器 甕	18		2.0mm以下の石英など	内外 2.5Y7/2 灰黄	1/5
15	弥生土器 甕	13.6		1.0mm以下の石英、金雲母、赤茶色粒など	内 10YR6/3 にぶい黄橙 外 7.5YR6/6 橙	8/8
16	弥生土器 甕	13.4		1.0mm以下の石英、金雲母、赤茶色粒など	内 5YR6/6 橙 外 5YR5/6 明赤褐	2/8
17	弥生土器 甕			1.0mm以下の石英、金雲母、赤茶色粒など	内 2.5YR6/6 橙 外 2.5YR6/8 にぶい黄橙	小破片
18	弥生土器 甕			2.0mm以下の石英など多量	内 2.5Y8/2 灰白 外 10YR7/4 にぶい黄橙	小破片
19	弥生土器 甕			2.0mm以下の石英など多量	内 5YR6/6 橙 外 10YR5/3 にぶい黄褐	小破片
20	弥生土器		3.8	1.0mm以下の石英その他少	内 2.5Y8/2 灰白 外 10YR5/2 灰黄褐	底部4/8
21	弥生土器		6.6	2.0mm以下の石英など多量	内 10YR4/2 灰黄褐 外 10YR5/3 にぶい黄褐	底部8/8
22	弥生土器 高杯		7.4	1.0mm以下の石英その他	内外 10YR8/2 灰白	底部8/8
23	弥生土器 鉢	10.3	3.1	1.0mm以下の石英、金雲母、赤茶色粒など	内 10YR7/4 にぶい黄橙 外 7.5YR6/6 橙	8/8

第1表 遺物観察表

ふりがな	ししぶせ・なかしょいせき							
書名	鹿伏・中所遺跡							
副書名	県立三木高等学校東駐輪場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	木下晴一							
編集機関	香川県教育委員会							
所在地	〒760 香川県高松市番町2丁目1-10 NTTビル TEL 0878-31-1111							
発行年月日	1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ししぶせ なかしょ 鹿伏・中所	きだぐん みきちょうししぶせ 木田郡三木町鹿伏	37341		34° 16' 18"	134° 8' 20"	平成8年 8月12日～ 9月9日	160m <sup>2</sup>	駐輪場 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
鹿伏・中所	集落跡	弥生時代後期	竪穴住居跡 掘立柱建物 土器棺墓		弥生土器			



県立三木高等学校東駐輪場建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概報

鹿伏・中所遺跡

平成10年3月

編集・発行 〒760-0017  
香川県高松市番町2丁目1-10 NTTビル  
香川県教育委員会

印刷 株式会社中央印刷所